

自然の中で

野外教育情報

2021 第 **13** 号 「距離感」

◆今号の特集◆

令和3年2月25日発行

公益財団法人 日本教育科学研究所

森と私の濃い距離感

大石 康彦（森林総合研究所多摩森林科学園：研究専門員）

人と自然との距離感というと、人と自然とが大なり小なりの距離において向き合う姿が思い浮かびます。現在では自然は人が保護する対象でもあります、人類史を通じて自然は克服すべきものであったのです。しかし、自然のなかであって一つの命を生きていることにおいては、人も他の動植物と同じです。自然体験をしている私も仲間や指導者も、動植物と同様に自然の一部です。人も自然の一部であると考えれば、人と自然との距離といったとらえは超越されてしまいます。

ところが実際には、森のなかは暗く、斜面は藪におおわれ、虫がつきまといます。子どもだけでなく、大人にも自然に拒否反応を示す人が少なくありません。自然体験を苦痛に感じる人もいるわけです。そこには、人と自然との間に大きな距離感があるようです。このような現実を考えれば、自然体験は単に人と自然との間の物理的な距離を縮めればよいものではないとわかります。

現在の私たちは、大震災や感染症などの脅威にさらされています。それらは、「自然の上に立ち、自然をコントロールする姿は幻想にすぎない。人は自然の懐に抱かれることで安らぎを得ることができるのだ。人の叡知はそのために用いられるべきものなのだ。」という、自然から私たちへの警告のように思えるのです。私たちは、自然からかけ離れたところに立って力をふるっても、自然を克服することはできないのだと悟らなければならないと思います。

自然は様々な生物、土、雨雪、太陽光などの無数のつながりが織りなす織物のようなものです。私たちの自然体験は、その織物を鑑賞するのでしょうか、織物の上で食べたり遊んだりするのでしょうか。自然体験は、自然の織物のなかに自らを織り込むものだと考えたいと思います。私も自然の一部だと信じていることができるならば、難しいことはありません。きっと美しい織物になるはずですよ。

私は、森に立つ自分が森の一部になっている“織り込まれ感”を大切にしたいと思います。森と私の間には濃い距離感があります。みなさんと自然との距離感はいかがでしょう。

● 大石 康彦（おおいし やすひこ） 1956年東京都生まれ。高度成長期に雑木林や田畑が消えゆく東京郊外で育ち、森林の仕事に行き着いた。林野庁勤務を経て研究の道へ進み、1996年から森林教育の実践と研究に取り組んできた。野外教育学会には設立時から参加し、野外教育と森林教育の連携を模索してきた。日本野外教育学会評議員

非日常の森と人間の生活



白濱 真友

昔、人間にとって森は「日常」であり、「生活空間」でした。建築材、食べ物、燃料など様々なものを森から得て生活をしていました。湿潤な環境の日本には様々な種類の植物が存在し、その中には外敵から身を守るために毒を持つ植物もあります。人間は、それら有毒植物までも調味料・薬など生活をより良くする材料として活用してきました。植物だけでなく、ハチやヘビなどの危険生物や野生動物たちも生活環境の一部として存在を認識し、適切な付き合い方、正しい知識が伝えられてきていたのではないのでしょうか。

しかし、現代の都心部に暮らす子どもたちにとって、森は野外教育のフィールドや一般のレクリエーションの場として訪れる「非日常」的な空間となっています。そのため森で初めて出会う植物や生き物たちとの適切な距離感がつかめず、事故につながることもあるのではないかと考えています。例えば、毒をもつヘビも積極的に人間を攻撃しようとは考えていませんが、人間がちょっかいをだすことで咬まれてしまうことがあるそうです。彼らを刺激しない距離感を指導者も学んでいき、活動の参加者に伝えるということも必要なのだと考えています。

また、現代の人間と自然との距離感の変化は危険生物・野生動物由来の事故のみならず、多くの

問題の一因となっています。いま話題となっているのが、COVID-19のような「人畜共通感染症」です。

Natureダイジェスト(10月号)の記事によると、動物から人間へ伝播する感染症の集団発生はここ数十年増加傾向にあることが明らかになったとされています。これは、野生動物が人間や家畜と出会う機会が増えたからだけではなく、インフラ整備のために未開発地の森林を伐採し、生物多様性が減少したことが原因の一つだと考えられています。

生物多様性の減少に伴い、都市環境に適応していける生物が生き残っていきませんが、それらの種は人にも感染する可能性のある病原体の宿主となりやすいとのこと。日本の場合も、単一で管理の行き届いていない森林や沿岸域の埋め立てなどの様々な要因から生物多様性は減少傾向にあると言われています。

現在、多くの人にとって森は「非日常」の空間になり、その役割は目に見えづらいますが、自然と私たちはいまでも互いに影響しあう関係です。気候変動や感染症など、様々な問題が浮き彫りになってきた現在、もう一度、自然と私たちが互いに与える影響を見つめ直す必要がありそうです。

都市部での環境・自然生物教育を実践する私の役割は、森を「日常」に感じてもらい心理的な距離感を縮める体験を提供することではないかと感じています。箸や香料など様々な姿を変えて家の中に存在する「樹木」など、都市部でも自然のつながりや利用を考えるための材料はたくさんあります。これからも、これらの材料を使って、都心部の子どもたちと自然・生き物と人間の関係について考えていきたいと思っています。

● 白濱 真友 [しらはままゆ]

危険植物のリスクマネジメントや、樹木の利用や役割を学ぶ森林資源学を専門とする自然生物教育指導者。



都市公園での環境教育の一場面

人と関わることでより豊かな人生を



三浦 さなえ

高校の頃からトレーナーに憧れて専門学校に進学、卒業後は夢であったパーソナルトレーナーの仕事につきました。一人ひとりに合ったトレーニングやストレッチを提案し、体質改善に加え、日常生活に運動を取り入れて習慣化し、生涯サポートできるようクライアントと向き合い15年以上が経ちました。

この仕事は、人との距離感を心地よくするためのヒントが多くあると思います。知識や技術があってもクライアントとの関係性が良くなければ、良い結果に結びつきません。

まずは、相手の話を聴くこと。つぎに、自身が持つ相手への先入観を払拭し、自らの価値観を相手に押し付けないこと。「痩せたい」と希望する方は多いですが、クライアントの数だけ異なる理由があります。気持ちや考え、深いところにある想いを伝えて頂くために、相手を知り、尊重することは欠かせません。

パーソナルトレーナーになり15年経った頃、仕事を辞めて環境を変えることを選びました。9カ月間、ニュージーランドへの留学です。

日本での多くの方と関わる仕事は充実感がある生活でしたが、いつしか自分より相手を優先する生活となり、時に心が苦しくなっていました。

ニュージーランドでやりたかったことは1つだけ。自分の為に時間とお金を使うことです。

ホームステイで見ず知らずの人と共同生活。身振り手振りのコミュニケーション。22時就寝、7時起床の規則正しい生活。週末はホームステイ先の家族や友人と山や海でキャンプやアウトドアスポーツを堪能。

このような生活を6カ月間過ごし“自分が生きる上で大切にしたいことは何か”に気づくことができました。自分が相手に歩みよるだけでなく、自分が自身のモットーを大切に生きていることで、相手とお互いに心地よい距離感を保ち共に歩める



NZにて、大自然のなかでアウトドアスポーツを堪能

のだと。

近所同士の仲が良く、すれ違えば挨拶やアイコンタクト、誰かが困っていたら皆で考えを出し助け合う。人と同じように自然や物も大事にする。居心地良く、幼少期の思い出とも重なり懐かしく、心身ともに充実した時間を過ごしました。

その後3カ月間は、あえてノーブランの一人旅をしました。行先で出会った人や地元の人にお勧めを聞き、次へと移動します。他人が感動した景色や場所、食べ物などの世界観を体感して、自分自身の好きなことを改めて確認することにしました。

自分はなにをすれば喜び、楽しみ、誰となにをしたいのか、はっきり相手に伝えられるようになりました。自分を後回しにしていた日本での生活から離れ、自分と向き合い、より自分を好きになることができました。自分自身を大切にすることで、相手をより尊重できるようになったと感じています。

一人で生きていくことを選択すると、人と関わることでの悩みやストレスから開放され、生きやすくなったように感じるかもしれません。しかし、人と関わり悩むことは共に生きるための第一歩であり、多くの出会いを通じて、人との関わりが人生を豊かなものにしてくれると私は信じています。

● 三浦 さなえ [みうら さなえ]

パーソナルトレーナー／体験教育ファシリテーター

専門学校卒業後、パーソナルトレーナーとしてスポーツジムに勤務。NZ留学により、教育カリキュラムとしての冒険教育と出会う。夏の間は北アルプスの山小屋にスタッフとして勤務。

馬の力で感覚がひらき、自然とつながる



黍原 豊

冬のある日、雪で白く染まった畑の周りの畦道を子どもは馬にまたがり、私が馬を引いて散策していました。背後に違和感を感じて振り返ると、子どもは馬の上で、自然にトロトロに熟した柿の実を美味しそうに頬張っていました。馬と一緒に活動していると、子ども達は、心と体が解放され、周囲の自然とつながっていきます。

現在、私は、築95年の古民家で馬3頭と暮らしながら、毎月延200名以上の子ども達の受け入れをしています。馬との暮らしから学んだ、「人と自然」の距離感を縮めるヒントをお伝えします。

【都市化による自然との断断】

都市化が進んで、私達の暮らしから自然が切り離されてきた現状があります。日常の生活で私達は、四季の変化や自然から感じ取れる様々な情報を暮らしの中で感じる事が、とても少なくなりました。かつて自然と共に暮らしていた人であれば、わずかな自然の変化にも気づくことができましたが、現代の多くの人には、そういう感受性がとても弱くなっています。

今の人達を自然の中に連れ出しても、自然を感じ取ることが難しく、自然から情報をキャッチする力はとても弱くなっています。そのような中で、馬が介在することで、私達を自然とつないでくれる橋渡しの役割をしてくれます。



馬と歩けば、心と体が解放される

【自然と人をつなぐ馬の力】

馬と関わるには、非言語コミュニケーションが必要です。馬から感じ取る変化に気付き、非言語による応答をすることで、馬との関係性は深まります。しかも、馬は行動としてすぐに反応してくれるので、自分がちゃんと感じ取って応答できていたのかが、見て分かります。馬とやり取りをしていると無意識のうちに感覚がひらいていきます。

このように、馬を通じて、これまで頭で概念的に把握していた世界を、言葉にならない心で捉え直すことが出来るようになります。冒頭でお伝えした、子どもが柿の実に自然と手が伸びて食べる状態につながっていきます。最初は、目の前の自然に目がいかなかった子ども達が、馬と関わる中で、変化していきます。

馬に乗れば視線も高くなり、周りの景色にも気付きます。流れてくる風や川のせせらぎ、四季折々の山の彩りの変化などにも。自分の感覚がひらくことで、周囲の自然との距離がグッと近くなるだけに留まらず、「私は自然の一部なんだ」という感覚を得ることができます。このように、心で世界を捉え自然とつながることは、持続可能な社会を形成していく上でとても大事な感覚です。他者とより良い関係を築く社会性といった非認知能力を育む土台にもなります。

ぜひ一度、馬の力に頼りながら、自然とつながる感覚を味わってみてください。やみつきになること、間違いなしです！

● 黍原 豊 [きびはら ゆたか]

(一社) 三陸駒舎 共同設立者

東日本大震災を機に岩手県釜石市に入り、復興まちづくりコーディネーターを経て、子ども達の継続的な支援の必要性を感じ、2015年に馬の力に頼ったホースセラピーの場を創設。2017年には障がい児を対象としたホースセラピー&自然体験の事業にも着手。

『おもちゃのチャチャチャ』



市川 雄一

僕が生まれて初めて好きな女の子に告白をした時の話です。

あれは高3の9月、待ち合わせた校舎裏のベンチに向かうと、彼女が先に座って待っていました。僕は彼女に「お隣よろしいですか?」と言いました。なぜ遅れて行ったのか、なぜそんなセリフを言ったのか、今となっては思い出せないのですが、緊張してパニック寸前だったことだけは間違いありません。

頭が真っ白な僕は、さらに猟奇的な行動を起しました。僕は、彼女の真隣に座ったのです、スカート踏むぐらいの真隣です。すると彼女は小さな声で「きゃ」と言い、まるでキャンプファイヤーの「おもちゃのチャチャチャ」のように、すごいスピードで立ち上がり、「本当にごめんなさい」と言って逃げるように走っていきました。

その年、クラスの流行語大賞は「お隣よろしいですか?」でした。

「距離感」と言われると、こんな失敗談ばかりが思い出されます。今となっては笑える話ですし、そんな自分が結構好きだとも思います。

けれど、子どもたちはそうもいきません、そばにいる大人が本当に大切です。

僕は自然体験活動の指導者として、キャンプや林間学校の現場でたくさん子どもたちに出会います。数年前、僕はとある公立小学校の長期宿泊体験(4泊5日)の指導をしていました。

初日の夜でした。見回りの先生から「〇〇くんが部屋に居ない」と報告を受け、大人総動員で捜索にあたりました。彼は、すぐに施設ロビーのソファで泣いているところを発見されました。

宿泊体験の初日のトラブルは決して珍しい事ではありません。ホームシック? 部屋の子たちと何かあった?、とたくさん理由を想像しました。

しかし彼には、どの理由もピタッと当てはまりませんでした。担任の先生から、彼の、少し周り

と違う家庭の事情を聞きました。先生と僕は、彼にとってこの宿泊体験の生活や人との距離が、いつもの日常とあまりにも違いすぎてパニックになってしまったのかな、と考えました。

彼はその日からは、ロビーのソファで寝ました。もちろん担任の先生は毎晩付き添い、僕も彼と沢山話をしました。彼が泣いたのは初日の夜だけでした。最後の夜、彼は「部屋で寝たい」と言いました。しかし、部屋の中に一度入ったものの、やっぱり寝れず、部屋の内側のドアの前に布団を敷いて寝ました。担任の先生と僕は、それでも嬉しくて、思わず握手をしたのを今でも覚えています。



キャンプの始まりの挨拶(著者)、絶妙な距離感。

それ以来、宿泊学習の指導の時はいつもこの話と、生まれて初めての告白の話を思い出します。

なぜかという、ソファで泣いてる彼を最初に見つけたのは、僕だったからです。

僕は、泣いてる彼にどう声をかけていいのか分からず、そっと近づいて、1mぐらい離れたところにちょこんと座ってみました。

大丈夫、彼には逃げ出されませんでした。

●市川 雄一 [いちかわ ゆういち]

野外教育事務所 hare no tag 代表

1987年生まれ。山梨県在住。余暇支援団体ほかほか副代表(<https://ja-jp.facebook.com/pg/pokapokaCAMP/about/>)、国際基督教大学 非常勤講師

山に通って感度を磨く



河野 格

今、この原稿を書き始めて窓の外に目をやると、冬枯れのコナラの幹回りをヤマガラが忙しく飛び回っています。遠くに目を転じると、丹沢の山々が青空の下にくっきりと見えます。

3年前、八王子市の多摩丘陵付近に引っ越しをするとき、最後の決め手は「窓の外すぐそこに雑木林がせまり、遠くに山が望めること」でした。そこは、平成たぬき合戦ぼんぼこの舞台となった多摩ニュータウンのなかでも、既存林と呼ばれる伐採を免れた雑木林で、周辺環境のなかでは最大限に季節の変化を感じられるポイントでした。この林との距離感は、僕に日常の安心感を与えてくれます。

山を始めて20年、ガイドとして独立して5年が経ちます。僕は山登りをスポーツとして捉える以上に、「日本の山で四季の移ろいを常に感じたい」という気持ちがあります。



冬の到来を告げる雪が降る前の霧氷

芽吹き春にむせ返るほどの濃い深緑の夏、鮮やかな紅葉の秋に霧氷を形成し雪を纏う冬。日本の山の機微は美しく、地域によってもタイミングや純度、濃度が異なるため飽きません。その微細な変化をキャッチするのが好きで、お客さんと仲間と家族と、山に通い続けています。そして、ガイドとしてできる限り最新の山の自然状態を更新することが、務めであるとも思っています。

現在の僕は仕事やプライベートを含め、「山に通う」ことで山からのメッセージを受け取れる感度を磨き、アップデートしています。その意識的な基準が「年間100~120日通う」というものです。これ以上少ないと日に日に変化する山の表情を見逃してしまうような気がして、ソワソワします。

例えば山での冬の到来は「雪虫が舞う→霜がおりる→地面が凍り付く→霧氷が木々にピッシリと張り付く」と変化しますが、雪が降る前のこれらのサインは、定期的に通うことで出会える光景です。一方これ以上多く通うと、家庭のバランスを失うのは自明の理です…。特に根拠はなく僕の感覚的な数字ですが、「山と僕」の大切な距離感です。

「山と僕と参加者」と3つの距離感に思いを巡らせてみます。恩師のベテラン山田哲哉ガイドや大先輩森林インストラクターの西野ガイドからは大いに刺激を受け、僕もそのように在りたい!と思わせてくれます。

それは「ワクワクする自分を率先してさらけ出し、参加者を自然の魅力に引き込んでいく」ことです。自分と山の距離感に、参加者も入り込んでもらう感覚で、これによって参加者と山の距離感がグッと近づくと感じています。

「富士山は本当に別格の大きさだなあ…」と眩くだけでも十分ですし、「なんでこんなに鋭い谷なんだろう…」と参加者からの疑問を一緒に探求する姿勢も保ちたいものです。「霧氷って心洗われるなあ!」と嬉し驚くのもいいですね。

好奇心全開の背中を見せることで山や自然への愛が伝わり、参加者と山/自然との距離を大いに縮めてくれると思います。

● 河野 格 [ここのいたる]

JMGA認定登山ガイド、hanwagアンバサダー

1986年生まれ。NPO法人都留環境フォーラムで環境教育及び野外教育事業に従事した後、登山ガイドとして独立。「一歩一歩進めば必ず山頂に立てる」をモットーに老若男女問わず活動中

日常的に自然に触れる



小倉 宏樹

大学生の時に手伝った子どもキャンプをきっかけに、それ以来ずっと野外教育に関わっています。

キャンプの効果は直後に大きく現れるけれど、徐々に薄れていくという研究結果が出ていると聞いて、いっそ日常的に自然に触れる機会を作れば、その効果は継続するのではないかと考えるようになりました。

2004年に設立したよみたん自然学校はおかげさまで18年目となります。設立3年後には、3～5歳を対象とした日常的な自然体験の場である3年保育「幼児の学校」事業を始め、さらに3年後には、小学生を対象としたフリースクール「小学部」事業を始めました。

「幼児の学校」でも「小学部」でも、あらかじめ決められたプログラムはほとんどありません。子どもたち自身でその日その日の活動を決定します。自ら決めた活動への子どもたちの集中力は高く、失敗しても何とかしようと試行錯誤し、自ら考え行動する力を育てています。

長く続けてきたことで、卒業生が中学生、高校生となり、卒業後どのように過ごしているのかを聞けるようになりました。例えば、動物好きな子が、フリースクール卒業後公立中学校に進学し、畜産の勉強がしたいと農林高校に推薦で合格しました。そして、農林高校では自分のやりたいことが十分にできなかったと、県外の農業者研修教育を行う専修学校を自分で探し、進学しました。自分のやりたいことを見出し突き進んでいる様子を聞いて、将来どんな農業畜産従事者になるのか、はたまた、全く違う仕事をするのか、楽しみです。

そして、先日、ある自然体験活動指導者の方に「なぜか、フリースクールの卒業生は中学校で比較的良い成績を取る」という話をしたら、「実は、学校の勉強よりも、火おこしとか木登りとかの自然体験活動の方が、答えはないし考えることも多いし、難しいのかもしれない」と言われました。早

速そのことをフリースクールの卒業生に聞いてみると、少し考えた後に返ってきた答えは「学校の勉強は簡単じゃないけど、単純だと思う」

中学校のテストでは学校で習ったことしか出ません。学校の勉強は先生の言うことを聞いて、理解すれば、テストでは良い点数がとれてしまう。それを「単純」と言っているのけるとは。そうそう、自然体験活動は複雑なんだよ、社会に出たらもっともっと複雑なことに取り組まないといけないんだから、子どものうちから取り組んでいたら社会に出てもうまくやっていると。そんなふうに確信するようになりました。

自然体験活動を日常的に行うフリースクールは、実は、ほとんどありません。取り組んでみたい方いませんか？お手伝いしますよ～



赤瓦の木造一軒家がよみたん自然学校の校舎

● 小倉 宏樹【おぐら ひろき】

よみたん自然学校 代表

1972年神戸市生まれ。ボーイスカウト活動が、野外活動の原点。大学時代のキャンプカウンセラー経験をきっかけに野外教育に関心を持つ。

2004年よみたん自然学校開校。ジャパンアウトドアリーダーズアワード (JOLA) 2018 大賞受賞。

離島の離島に移住して

▲ 沖縄県多良間島にて 角田 貴世

東京都区で生まれ育った私は、現在沖縄県の宮古島と石垣島の真ん中にある多良間島に住んでいます。島は1周約20km、人口約1,100人。

主な産業は農業と畜産業、飛行機が1日1往復宮古島に飛びます。

【自然との距離：近い】

タラマブルーと呼ばれる綺麗な海は、集落から歩いて行けます。透き通る海には珊瑚やカラフルな魚がいっぱいで、食料として魚や貝を手に入れる場所でもあります。

私はこの海で、潮の満ち引きを目の当たりにし、台風が来なければ海水温の上昇で珊瑚が死んでしまうと学びました。



多良間の海

空もとても綺麗です。太陽が出れば暑くなり、風が吹けば雲が流れ、雨雲が近づけば冷たい風が吹いて雨が降り、虹がでることも多いです。

また、雨が降らなければ植物は枯れてしまうし飲み水もなくなりますので、雨は正に天の恵みです。

この島で生きることは、自然と共に生きることです。

【人との距離：近い】

初めて多良間に来た時フレンドリーな人々だと思いました。観光客が少なくほぼ島民ですので、すれ違う人とは挨拶をします。移住した最初の頃

はよく「寂しくない？」と声をかけてもらったものです。

集落は1か所にまとまっていて、子どもたちは中学校まで各学年1クラス、大人は島に住む＝島で仕事する環境で、地域行事・伝統行事が多く、支え合って生きています。

娯楽が少ないので人とおしゃべりするのが楽しみの一つですし、物理的距離が近く接触頻度が高いので、みんなが家族的・友人的な関わりです。

「ほぼ他人」の東京から「ほぼ知人」の多良間に移住して、距離感の違いからコミュニケーションに戸惑うこともありましたが、今は馴染んだものです。

【直接体験：気持ちいい距離感】

直接体験から得られる感覚はとても大きいです。相手を尊重し思いやる心は伝わりますので、お互いが気持ちいい距離感でいるために大事なことだと思います。

多良間では近頃のインターネット活用で、物理的距離がある人や情報との距離が近くなりました。知らない世界や人との出会い・体験は自己を広げてくれます。

私が多良間で沢山の経験をさせてもらっているように、多くの方々に体験の機会や人との出会いが増えますように。



● 角田 貴世【つのだ たかよ】

畜産業（黒毛和牛の繁殖）

1981年生まれ、東京学芸大学（野外教育）修了、フリーランスで野外教育に携わる。2013年より多良間島で生活中。



アウトドアゲーム指導法講習会 国立曾爾青少年自然の家との共催で 「1日2日コース」を開催!

開催概要

今回は、通常の出張講習会の内容に加えてコロナ禍での自然体験活動という点も踏まえて展開しました。

野外教育に関係する団体職員からボランティアの学生など様々な方が参加しました。

日程：2020年9月26日（土）～27日（日）

会場：国立曾爾青少年自然の家（奈良県宇陀郡）

講師：鶴川高司・中丸信吾（研究所レギュラー講師）
徳田真彦（大阪体育大学）

通常は2泊3日での講習会を実施していますが、当研究所のレギュラー講師が出張指導し、1泊2日に凝縮して行った講習会です。ゲームの体験だけでなく、ゲームの創作まで展開します。

活動内容

9月26日（1日目）

開講式の後、フィールドに移動して活動開始。アイスブレイクの後、各講師による課題解決型ゲーム「ビッグ・キーパンチ」「ロング・パイプライン」「アメーバ」を体験。いずれのゲームも課題解決のゲーム性を保ちながら、ソーシャルディスタンスに配慮した工夫（道具のサイズやスペースを広くする）を加えて実施しました。

課題解決型ゲームが終わると、自然体験型→自然学習型とゲームを展開しました。自然体験型ゲームは徳田講師による「林間立ち木取り」。いつもはペアで手をつないで立ち木にロープを結びますが、今回は2人の間を棒でつないで行いました。

自然学習型ゲームは中丸講師の「色探し」。フィールドにある「色」に着目し、3つの色カードにピッタリ合う自然物を集めました。最後は2チームの「どっちがより近い色を持ってきたか対決」に一喜一憂しました。

夕方から徳田講師の「子どもたちの体験活動」に関する講義。子どもたちの自然体験の重要性について説明しつつ、こんなときだからこそ自然体験について「考え続ける」「動き続ける」重要性をお話いただきました。

夕食後のナイトゲームは中丸講師による「闇夜のお絵かき」。今回は創造イメージ型ゲームとして行いました。真っ暗なフィールドでストーリーをもとにお絵かき、昼

と夜の色の感覚の違いに困惑しながら完成。たくさんの名作（迷作?）が生まれました。



ソーシャルディスタンスに配慮したアクティビティ

それぞれのゲームを体験した後は、いよいよゲーム創作。鶴川講師がゲーム創作のポイントを解説し、ゲームづくりが始まりました。

9月27日（2日目）

朝食後、創作ゲームの仕上げです。アイデアを形にするために、シミュレーションをして検討している様子。ゲーム発表では4つのゲームが生み出されました。

発表を終えた後は参加者と講師、今回のゲーム体験とゲーム創作について振り返りを行いました。

自然体験を止めるな!

新型コロナにより多くの体験活動の機会が失われていますが、このような状況でも適切な感染対策とプログラムの工夫をすれば自然体験を実施することができます。対象やフィールドに合わせてゲームをアレンジすることができるIORE Sheetは、コロナ禍でも活用できます。

1泊2日で、ゲーム体験からゲーム創作までの展開ができます。自然体験活動のボランティアや指導者の研修を兼ねて実施することも可能です。全国どこでも伺います。最後に、国立曾爾青少年自然の家の皆様、ありがとうございました。この場を借りて感謝申し上げます。

報告：中丸信吾【なかまる しんご】
日本女子体育大学 講師
当研究所：自然体験活動推進委員会委員



アウトドアゲーム指導法講習会 神奈川県立教育センターとの共催。 足柄ふれあいの村で「1泊2日コース」を開催!



開催概要

日程：2020年11月21日（土）～22日（日）

会場：足柄ふれあいの村（神奈川県南足柄市）

講師：野口和行・鶴川高司（当研究所レギュラー講師）

神奈川県立青少年センターからのお申し出に応え、出張講習会を実施しました。コロナ禍の緊張感の高いタイミングでしたが、担当者、参加者のみなさんの前向きな協力態勢で、感染リスクを意識しながら2日間をすごしました。

今回の講習会では大前提としてソーシャルディスタンスの確保があります。参加者もそこに関心を持っている方が多いようでした。

数多くの指導経験のあるベテラン、施設職員、自然学校の職員、これから指導に関わる学生とパリエーション豊かな参加者で、お互いに大きな刺激になったように感じます。



活動内容

11月21日（1日目）

開講式後はアイスブレイク。当然ながらソーシャルディスタンスを意識しながら進行します。楽しむ能力が高い参加者のため、とてもスムーズに進行します。もともとの知り合いのような雰囲気になっていきました。

午後は**課題解決型ゲーム**からスタートです。

「パイプライン」と「アメーバ」。いずれもソーシャルディスタンスがとれるようにアレンジをしています。このようにアレンジをすれば自然体験活動の実施が可能です。



マスクとソーシャルディスタンスで、活動開始

自然体験型ゲームは「林間立木とり」。二人組でちょうちょう結びで木に結わえるのは結構大変！ 四苦八苦をしながら結びつけるのですが、もどかしさも楽しそうですね。

創造イメージ型ゲームは「森の気持ち探し」。“さすががしい”気持ちを表す自然物ってなに？とフィールドを探索まわります。

自然学習型ゲームは「カメレオンゲーム」。これが圧巻でした。経験豊富、アイデア豊かな参加者の本領発揮。大胆な作品があったと思えば、実に上手く特徴を捉えた“生き物”を作って、フィールドに潜ませる班もあり、見つけた“生き物”に感嘆の声が上がることもありました。

外が暗くなってきたので、研修室で講義を行いました。

ナイトゲームは「光の虫眼鏡」。活動の表現は、俳句。ここも参加者のみなさんの感性が発揮されました。素晴らしい作品が多数ありました。体験はここまでです。

本講習はゲーム創作をすることが核心部です。創りたいゲームのタイプで班分けをし、明日の発表に向けてアイデアを出し合います。

11月22日（2日目）

朝の集いの前に、創作ゲームのシミュレーションをしている班もありました！ 素晴らしい熱意！

創作ゲームの発表会では発表側も体験をする方もみんな楽しそうでした。やはり楽しむ能力の高い皆さんです。ゲーム作者の予想をはるかに上回る展開が生まれたりすることも。講師という立場ではありましたが、大いに楽しませていただきました。

ゲーム創作の第一歩は既存ゲームのアレンジです。フィールドや対象者に合わせてアレンジをするだけでも、立派な創作ゲームといえます。そこに魅力的な参加者が加わると、活動の完成度が一気に上がります。今回の創作ゲームの発表会は“そこ”を強く感じました。

1泊2日の短い時間ですが、いろいろな展開が可能です。コンパクトだからこそ集中して取り組めるからでしょうか。とても充実した時間でした。

報告：鶴川高司【つるかわ たかし】

有限会社 掌 代表。

当研究所：自然体験活動推進委員会委員



IOREオンライン情報交換会を 開催

開催概要

新型コロナの影響でアウトドアゲーム指導法講習会が中止となり、主催の事業を行うことができませんでした。

そこで今回、新型コロナ禍での現状の共有や新しい取り組みの紹介、今までの講習会参加者ネットワークを再構築し、今後の対面での講習会に繋げるために開催しました。

日時：2020年10月29日（木） 20：00～21：40

主催：公益財団法人日本教育科学研究所：自然体験活動推進委員会

委員：平野吉直、鶴川高司、野口和行、中丸信吾
担当理事：土井浩信

参加対象：過去のアウトドアゲーム指導法講習会の参加者（19名）

司会：平野・野口

全体マネジメント：鶴川

会議内容

○ 開会、委員紹介、参加者自己紹介

平野委員長の挨拶で開会。委員および土井理事からそれぞれ自己紹介と近況報告を行い、その後、参加者による自己紹介と近況報告が行われました。

○ 講習会事業の紹介

事例紹介として、中丸委員が、9月に行った国立曽爾青少年の家での出張講習会について報告しました。1泊2日でゲーム体験からゲーム創作まで実施した出張講習会の説明に加えて、今回は特に、新型コロナ禍で感染防止対策を講じた上でどのように工夫してゲームを行ったかということにフォーカスして報告をしました。

野口委員より、11月21日（土）～22日（日）で神奈川県立青少年センターと共催で県立足柄ふれあいの村で実施する自然体験活動指導者セミナー（IORE Sheetを活用した指導者向けの研修会）の紹介がありました。

○ ブレイクアウトセッションによる情報交換

事例報告の後は、野口委員の進行で、全体を5グループ（1グループあたり委員を入れて4～5名）に分けて、それぞれブレイクアウトルームで情報交換を行いました。

情報交換終了後、メインルームにおいて、各グループ

で話した内容についての共有を行いました。

それぞれの指導現場でのコロナ対策の現状、コロナ禍での青少年教育施設の実施状況、学内にて日帰り実習として実施した大学の野外実習の報告、オンラインでのプログラム展開、ソーシャルディスタンスを配慮したアクティビティの展開などについて情報交換をしたとのことでした。

○ 今後に向けて参加者からの意見聴取

平野委員長より参加者へ、今後の講習会やこのようなオンラインでのイベントでの要望について意見を伺ったところ、参加者から以下のような意見をいただきました。

- オンラインでの、アイスブレイクや課題解決型のアイデアの共有をして欲しい。
- コロナ禍での活動についての情報交換の場が欲しい。
- オンラインの特徴を生かした、対面とは違ったコンセプトでの活動の提案。
- それぞれの対象に合わせた、ゲームパッケージの提案。

○ 閉会

これまでの講習会参加者を対象として開催したため、久々に再会する方がいたり、講習会という共通点で初めて会う方がいたり、大変貴重な時間を過ごすことができ、あっという間の100分でした。

おわりに

新型コロナ禍によりリモートでの活動に多くの時間を費やすことが余儀なくされました。しかし、こんな時だからこそ、直接体験である自然体験が重要であるということも再認識できました。IORE Sheetは汎用性のある教材で、工夫次第でコロナ禍でも安全に自然体験活動が可能です。

今を生きる子どもたちが豊かに育つためにも、自然体験を止めずに進めたいものです。

報告：中丸信吾【なかもる しんご】

日本女子体育大学 講師

当研究所：自然体験活動推進委員会委員

その日のために



金山 竜也

2020年から2021年、「距離感」について、これほど深く考えさせられる1年はありませんでした。もちろん、個人のレベルでは誰かとの距離感に悩んだりするのはまああること。でも、世界中ぜんぶが同時に距離感を巡ってがまんや試行錯誤を強いられるのは前代未聞です。

この感染症は人と人が交わることで広がるため、さまざまな「いっしょに過ごす」時間が削られました。いっしょにいるときもマスクをしたり、距離を置いたり、さまざまな壁が設けられました。

野外教育の現場も同じで、多くのキャンプが中止に追い込まれたり、感染予防のためにずいぶん窮屈な運営を強いられました。

自然とのふれあいに限れば、感染症対策という意味において、普通に考えると安全なはずですが、しかし、私たちが追い求めているのは、自然との1対1の対話だけではなく、自然を媒介とした人と人の関わりの深化です。だから、自然の中から大丈夫とはならず、やはり慎重にならざるを得ない状況があるのです。

試行錯誤の中で、オンラインでも思った以上の交流ができるもんだなと実感しました。しかし同時に、その限界も痛感し、早く元通りにならないかなあと切に願うのです。

ただ、この感染症の広がりや、現在の人と自然との関係に警鐘を鳴らすものだという考えもあります。

地球上では、毎年300億トンもの人工物が作られ、生物の総重量を超えたのではないかとされています。人がどんどん自然の中に踏み込むことは、環境破壊を招くというだけでなく、未知の感染症を広げる原因にもなるとされています。

今回の特集でみなさんが書いているのは、「人と関わるのはいいぞ〜!」「自然や生きものを媒介にした交流は奥深いぞ〜!」「人と自然との距離感を今一度見直してみよう」というメッセージです。

もう少し時間はかかるかもしれませんが、そう遠くない将来に安心して思いっきり人と人がふれあえる時が来ます。

その日のために、これらのメッセージを受けとめ、人と人の距離感や人と自然との距離感について、じっくり考えておきたいと思います。

強制的に距離が生じたことによる、プラスの発見もいくつもありました。

ただ元通りにするのではなく、考えた分だけ、気付いた分だけバージョンアップした、よりよい「距離感」を見いだせるようにしたいものです。



● 金山 竜也 [かなやま たつや]

(一財)青少年国際交流推進センター事業副部長
当研究所：機関誌編集委員

野外教育情報 2021 第13号 令和3(2021)年2月25日発行

発行所 公益財団法人 日本教育科学研究所

Japan Institute of Scientific Research for Education

〒104-0045 東京都中央区築地1丁目12番22号 コンワビル 5階

TEL. 03-6278-7761 / FAX. 03-6278-7683 <http://www.zaidan-kyoiku.or.jp/>

編集委員 野口和行、中丸信吾、金山竜也、鎌田晴美(自然体験活動推進委員会 機関誌・情報部会)

印刷所 株式会社サンワ
デザイン=寺澤彰二